

備陽史探訪

第54号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

神石郡油木町の 馬塚古墳について

篠原 芳秀

一、はじめに

本年三月一日に、当会の古墳・城郭研究部会を中心とする会員と地元の人達の協力で、古墳時代後期に築造された馬塚古墳の墳丘測量を行いましたので紹介します。

馬塚古墳は、神石郡油木町油木高水池にある、標高六一〇メートル余りの通称「二子山」の頂部に位置します。この付近は、水田との比高が約一〇〇メートルもあるかなり山の中に入ったところで、斜面は急峻です。ただ、二子山の高所から約一〇メートル下がった北側の裾部は、油木町の中心部から東の豊松村、さらには岡山県川上郡川上町に所在する備中高山市（穴門山神社）などへの古い幹線の山道が通っており、また、周囲は山に囲まれてはいるものの立

ち木がなければ北西方面に油木の町が望め、かつては重要な地点であったものと思われまます。

古墳の現状は、盛り上がった地形の中央部に入口を南西方向とする横穴式石室が築かれています。石室内は土砂が充満し、天井石と側石の一部が取り去られ、残っている四個の天井石も露出し、このうちの入口側の一個は西よりに動かされています。石室の規模は、長さが八・七メートルと推定され、幅は側壁上端で約一メートルです。入口部の側壁の石は急斜面にあり、石室に遺体などを運び込むことは困難な状態なので、石室前面は少し崩落しているものと考えられます。

二、これまでの研究略史

本古墳は古くから知られ、調査及び記述がなされてきましたので、管見に触れたものを取り上げて整理しておきます。

最初の文献は一九二七年に刊行さ

れた「神石郡誌」と思われます。ここには、「神石町高水池二子山上にありて瓢形高塚前方後圓なり、前面に石槨開けり。周囲二百間、濠の跡あり。・・・」とあります。瓢形高塚前方後圓と判断されたのは、明治三〇（一八九七）年、坪井正五郎氏によって発掘調査が実施された豊松村の孖山東方古墳（その後、拜山古墳、そして双子山古墳または孖山古墳と名称変更）の影響によるものと考えられます。

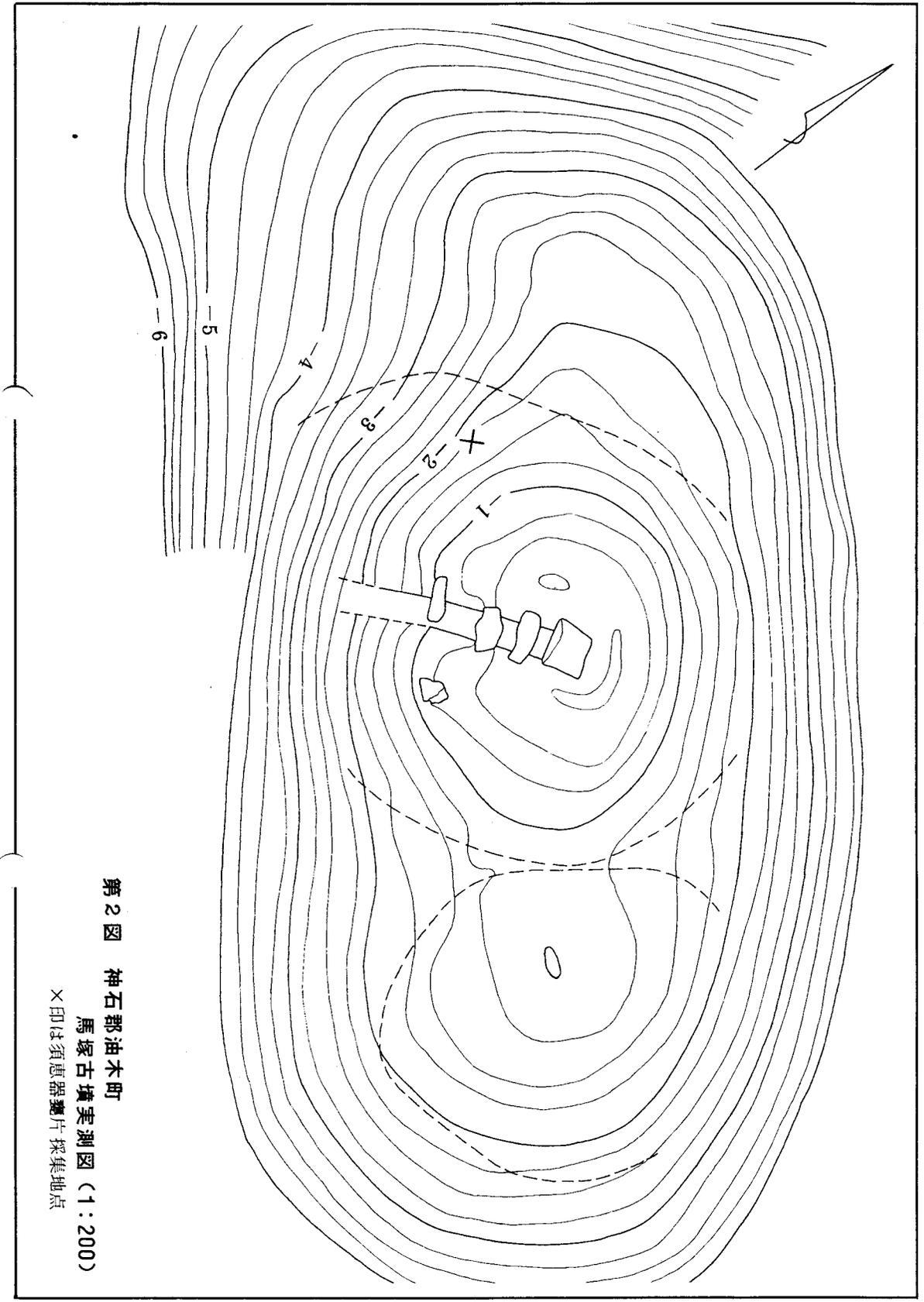
ついで、西川宏氏（一九四八・一九四九年に神石郡内の古墳の分布調査をされました。その記録を見ますと、所在地に続き「円墳 径一二メートル、横穴式石室 奥行四・五メートル 幅〇・五メートル 高末詳、石室破壊」とあります。この後しばらくは、当資料が引用されました。

ところが、村上正名氏は一九六三年に

分布調査され、「（前略）八鳥二号墳は馬塚といわれ、山は二子山といわれ、前方後円墳ではないかと思われましたが、封土の現状では中円双方墳とも見なされて今後の調査がのぞましいものです。中央直径一二・四メートルの円墳形のところに南向きに奥行八・七メートル、巾一・一メートルの横穴式石室が存在し、天井石も三個が現存し、内部は埋もれ



第1図 位置図（油木 1:50000）
1. 馬塚古墳 2. 八鳥古墳



第2図 神石郡油木町
馬塚古墳実測図 (1:200)
×印は須恵器銅片採集地点

て実測不可能です。」と記し、墳丘の断面図と横穴式石室の現状図を載せておられます。そして、最近までの資料の中で特に「中円双方墳の可能性」が引用されてきました。

三、今回の調査成果

私たちが作成した墳丘測量図は第2図の通りです。

二子山と呼称されるだけに、頂部には西と東に二つの円丘があります。上述したように、この二つの円丘は一つの古墳とみられたこともありましたが、頂部において二つの円丘の境には切り離すような溝状のくぼみが見られ、墳丘の下方部で接続を示す痕跡は見られないことから、それぞれ独立したものであることが明らかになりました。横穴式石室を有する西側のものは円墳と考えられ、大きさは径一五〇一八メートル、墳丘の南からの現高約四メートルです。東側の円丘も円墳の可能性がありますが、明瞭な墳形とならず、西側の古墳を築く際に掘られた溝により切り離されて残っただけのものと思われまます。もし円墳であれば、大きさは径約一メートル、墳丘の東側からの高さ約一・五メートルです。なお、西側の円墳から北西に延び

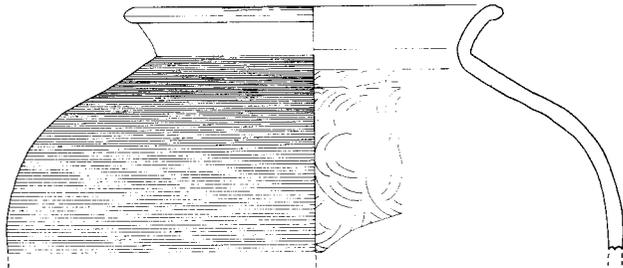
た部分は、前方後円墳の前方部ともみることができませんが、北東側は後円部との接続部分にくびれの痕跡がなく、下方部の墳形を形作ることが急斜面のため困難なことなどにより、古墳とは無関係の自然地形と考えられます。

墳丘西側裾部の地表面(第2図の×印地点)で、須恵器の壘(第3図)を採集しました。口縁部から胴部上半までの破片で、口縁部は少しゆがんでいます。大きさは口径一六・三〇一六・六センチ、残存高一・三センチ、胴部最大径二八・三センチです。粘土紐の巻き上げ成形で、口頸部は「なで肩」の肩部からゆるやかに外反し、口縁部は肥厚して丸くおさめますが、その上部は連続のヘラ押えによりわずかくぼみ(半周

くらはいは後の回転ナデのためかくばまないで丸みをもつ)、先端はやや尖り気味です。また、肥厚した部分の下端も連続のヘラ押えがみられます。口頸部は回転ナデ、胴部は外面が回転クシナデ、内面が同心円タタキの後に弱い回転ナデを施しています。ただ、胴部外面の回転クシナデ下に斜め方向の平行タタキのかすかな痕跡と頸部内面の回転ナデ下に同心円タタキの痕跡が観察されること

から、粘土紐巻き上げ後に胴部から頸部まで平行タタキと同心円タタキが表裏同時に行われたものと思われる。なお、同心円タタキの順は概ね時計回りです。色調は内外面・断面ともに明灰色で、胎土には少し砂粒を含み、中には最大長六ミリのものもあります。

横は、長さが八・七メートルと推定され、幅は側壁上端で約一メートルです。古墳の築造年代については考察する資料がほとんどありませんが、長方形の横穴式石室であることと石室の規模から、六世紀後半から七世紀前半の間であることは間違いないでしょう。また、採集した須恵器は壘の破片で、現段階では詳細な年代は明かではありませんが、この古墳にもなった遺物と思われる。



第3図 須恵器実測図(1:3)

墳丘の南からの現高約四メートルを計る円墳で、埋葬施設として南西方向に開口する横穴式石室を築いています。横穴式石室の規模

石室の規模は当地域では比較的大きなもので、油木の町を望むと共に山道とはいえ幹線に面した重要な地点に造られており、これらは被葬者の生前における地位を反映したものでしょう。すなわち、馬塚古墳は所在する「高水池」のみならずもう少し広い地域に勢力をもっていた小豪族の奥津城と考えられます。

註

- 一、広島県神石郡教育会「神石郡誌」一九二七年 頁五六五・五六六
- 二、西川宏「神石郡の古墳について」の覚書「芸備地方史研究」№3、芸備地方史研究会、一九五三年 頁一
- 三、豊元国編「附編 広島県古墳綜覧」三ツ城古墳―広島県賀茂郡

西条町―広島県文化財調査報告
第一輯(人文編)、広島県教育委員
会、一九五四年 頁一〇五

豊元国編『広島県古墳綜覧』第一
輯、府校学報一、広島県府中等
学校地歴部、一九五四年 頁四一

四、広島県教育委員会『広島県埋蔵
文化財包蔵地名表』広島県文化
財資料シリーズ第三、一九六一年、
頁一七九

文化財保護委員会『全国遺跡地図
(広島県)』一九六七年頁四八

文化庁文化財保護部『全国遺跡地
図 広島県』一九八二年頁四三

五、馬塚古墳がいつの時点で八鳥二
号墳とも呼称されたか明かでない
が、ほかの文献にはなく、また八
鳥一号墳は豊松村にあって以前か
ら八鳥古墳と呼称されており、村
上氏が調査時につけられた仮称の
可能性もあります。

六、村上正名「油木町のなりたち―
原始・古代前期の文化―」『油木
町のなりたち―原始・古代前期の
文化―』油木町史シリーズ第1、
油木町教育委員会、一九七〇年
頁五七

七、最近の考古学界の用語では、
「双方中円墳」の方がよく用いら
れています。

八、広島県神石郡誌統編刊行会『神
石郡誌統編』一九七四年
頁八六・八七

出内博都「神石郡」『広島県の地
名』日本歴史地名大系第三五巻、
平凡社、一九八二年 頁三八

堤正信「油木町 地誌」『角川日
本地名大辞典』三四広島県 角川
書店、一九八七年 頁一六九

※測量参加者名
田口、山口、篠原、七森、中村、
馬屋原、高瀬、杉原、出内(以上
会員)

徳良、横内(地元協力者)

新刊紹介

(溪水社刊) 堤 勝義著
中世佛後の宗教・在地武士

芸備地方における初期真宗について
渡辺氏について等 35編

(B6版二五八頁)
定価二三〇〇円(送料二五〇円)

講読希望者は現金書留又は郵便小為
替にて左記までお申し込み下さい。

〒721 福山市引野町北二丁目十二番七
堤宅

油木町古墳調査概報

城郭研究部会
古墳研究部会

昨年度、神石郡油木町より委託を
受けた「油木町古墳基礎調査」の実
施結果を報告致します。

一、墳丘及び石室の全部若しくは一
部が残存し、古墳と確認しうるもの

松ノ木古墳・塚風呂古墳・馬塚古
墳・塚本1・2号墳・三秀火塚・
藤野呂古墳(及び東城町分の田中
後古墳群)・奈良1・2号墳・太鼓
丸古墳(未登録)

二、新たに発見されたもの
円墳2基(新免、山川内上山中)

三、破壊されているが、石材その他
の状況から古墳の存在が確認される
もの

塚屋一号墳・花済古墳・大坪古墳
塚んだ古墳・中正古墳

四、完全に破壊されて存在が確認で
きないもの
宗兼古墳・恩木迫古墳・塚屋二号
墳・赤塚古墳

五、伝承あれども古墳として確認し
たいもの(再調査も必要か)
門田原古墳・今井古墳・高壘古墳
高水池塚迫

(調査日誌)

平成三年七月二〇、二十一日下調査
(田口・山口・網本・出内)

同 年十一月一〇日 塚風呂・塚
んだ古墳(山口・中村・七森・出内)

同年十一月二四日藤野呂古墳実測
調査(山口・網本・中村・藤井・田
中・七森・出内)

同年十二月七・八日 田中後古墳
実測等(田口・網本・中村・出内)

同年十二月二十三日奈良古墳(山
口・中村・七森・田中・出内)

平成四年一月十二日奈良、太鼓丸古
墳(山口・網本・中村・高瀬・七森・
田中・出内)

同年三月一日馬塚(田口・山口・
篠原・七森・中村・馬屋原・高瀬・
杉原・出内)

同年三月十五日松ノ木古墳(田口・
山口・中村・七森・高瀬・杉原・出
内)

同年三月二八・二九日新免方面(田
口・中村・高瀬・田中・出内・網本・
山口)

以上

中津藩の代官支配について

一 神石郡小島代官所の場合

出内 博都

一、奥平中津藩備後領の成立

慶長五（一六〇〇）年、関ヶ原の戦いで西軍の総師となった毛利輝元が辛うじて防・周二国の大名として命脈を保ったあとへ、福島正則が芸備四九万八千石の領主として広島へ入城したが、元和五（一六一九）年六月、武家諸法度違反の名目で改易になった。

福島改易後、浅野長晟が芸備八郡四二万六五〇〇石の領主として入封し、備後には譜代大名の水野勝成が十萬石で大和郡山城より神辺城（のち福山城）へ入封した。然し水野家はわずかに五代で元禄一一（一六九八）年五月勝岑病死のため継嗣断絶し一〇万石は収公された。その後一年余の間、曲瀨市郎右衛門・山木惣左衛門・穴倉与兵衛の三人による代官支配が続く、それに続いて同一二年より一三年にかけて備前岡山藩に総検地を命じ、旧領一〇万石を新高一五万五二石余に打ち出した。

同一三（一七〇〇）年このうち一〇万石の領主として出羽山形から松

平忠雅を任命し残り五万石余を天領とした。このうち神石郡三七ヶ村二万一九五一石余、甲奴郡二四ヶ村一万一〇六三石余、安那郡一〇ヶ村五八二石余が代官曲瀨市郎右衛門の支配となり上下陣屋が置かれた。備中小田郡のうち二七ヶ村一万六八石余、後月郡一ヶ村一三九石余が代官山木与惣右衛門の支配下で笠岡陣屋の支配となった。

享保元（一七一六）年九月中津藩主小笠原長邑の夭折により豊前国上毛・下毛・宇佐郡四万石を没収し、翌二（一七一七）年奥平昌成を丹後宮津より中津一〇万石に補した。この一〇万石の内容として、豊前三郡一六四ヶ村六万二〇七六石の他、不足分を筑前怡土郡二九ヶ村一万七九〇八石余、備後神石・甲怒・安那郡三六ヶ村二万一五石余で補った。

第 1 表 奥平中津藩の領域と石高

国	郡	石高
豊前	上毛	7,089.931
	下毛	24,144.73
	宇佐	30,841.3552
	三郡合高	62,076.0162
筑前		17,908.4258
備後		20,015.558
三領合計		100,000.

「領知目録」（中津城蔵）による。
（中津藩史料叢書）

第 2 表 中津藩備後領の村組制

国	郡	組	村名
備前	安那	小畑組 <16村>	百谷、北山
			小畑、常光、光末、上、光信、高蓋、父木野
	甲怒	階見、岡屋、水永、井永、斗升、佐倉、矢多田	
備後	神石	水野組 <11村>	高光、相渡、福永、牧、田頭、木津和
			抜湯、太郎丸、国留、安田、二森
	神石	油木組 <9村>	東油木、西油木、阿下、下豊松、安田、草木、永野、三坂、新免

「領知目録」「松平賦均録」による。

（表一参照）

中津藩備後飛び領は神石郡二二ヶ村一万五二九〇石余、甲怒郡一二ヶ村三九三八石余、安那郡二ヶ村七八六石余、合計三郡三六ヶ村二万一五石五斗五升八合で、領域の三分の二以上が、「山陰多く猪鹿猿喰荒」らすような辺鄙の山間地域で「極困難必至之村々」であった（木津和家「郡中連印願書扣」|| 中津藩史料叢書）、備後領の村組制は第 2 表の通りであり、必ずしも郡域にこだわっていない。残余の備後幕府領は三五ヶ村一万八五三六石余に減少したため、単独の代官支配を廃し、安那郡

四一九二石余（八ヶ村）、神石郡一四〇二石余（五ヶ村）を笠岡陣屋付とし、甲怒郡七一二七石余（一二ヶ村）神石郡五九六二石余（一〇ヶ村）を石見大森代官支配とし、上下陣屋をその出張陣屋とした。

中津藩備後領は現行市町村名では第 3 表の通りである。（中津藩史料叢書|| 一部修正）

二、中津藩飛地領支配の方式

飛地領支配について中津から藩役人を派遣して任地支配をする出張在番制と、現地の大庄屋の中から代官を任命して現地支配をさせる現地居郷制とを採用したが、藩制成立期においては現地の実情に精通した大庄屋を居代官に登用する現地居郷制を積極的に採用した。

即ち、幕領期の正徳三（一七一三）年に廃止された大庄屋および釣頭を復活させ、福山藩水野領時代から庄屋をつとめていた小畑村の村田荘右衛門知賢を、いったん大庄屋に任じ、さらに代官に抜擢して一円支配を委任した。

村田氏は自邸を代官所に提供した。代官所跡地は現在、役場・中央公民館・福祉センター等になっている。村田氏は藤原系で左大臣魚名の後胤

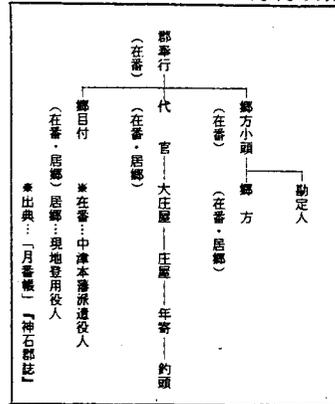
第3表 中津藩備後領の村々

郡	村名	天保4(1833)		読み	平成2(1990) 現行市町村名
		戸数	石高		
神	小常	775	781	こはたけ	三和町
	光末	274	920	つねみつ	三和町
	光上	205	705	みつあき	三和町
	光高	1,025	807	みつあき	三和町
	父木野下	256	121	みつふた	三和町
	阿木津	718	972	たかふた	三和町
	板坂	684	602	ちちまの	三和町
	三和	278	128	あきげ	三和町
	野下	549	240	きつわ	三和町
	渡野	678	653	みさき	三和町
	水草	815	559	あいの	三和町
	高瀬	1,167	598	なかつ	三和町
	高瀬	899	895	ながき	三和町
	高瀬	1,030	470	たかみつ	三和町
	石	田頭	1,444	800	ふくむつ
安田		370	752	まなき	三和町
下松		404	696	たんどう	三和町
豊田		582	143	やすだ	三和町
豊田		717	077	しほま	三和町
豊田		888	610	ひらゆき	三和町
豊田		832	672	にしゆき	三和町
豊田		588	765	しんめん	三和町
豊田		15,290	977	4町1村	三和町
豊田		783	979	しなみ	三和町
豊田		153	136	おかや	三和町
豊田		155	106	みずな	三和町
豊田		407	835	いふち	三和町
豊田		223	949	ふたもち	三和町
豊田		62	783	きくら	三和町
豊田	328	680	くにとめ	三和町	
豊田	484	285	ぬくゆき	三和町	
豊田	242	693	くにとめ	三和町	
豊田	276	691	たろまる	三和町	
豊田	633	616	やすだ	三和町	
豊田	185	346	とます	三和町	
豊田	3,938	101	1市4町	三和町	
豊田	290	990	ももたに	三和町	
豊田	495	490	きたやま	三和町	
豊田	786	480	1市	三和町	
豊田	20,015	558	1市8町1村	三和町	

と伝え武田氏に仕え信州岩村田に居りしをもつて村田を号した。武田滅亡後、神石郡父木野村に來り、入江大藏正高の臣となつたが後に民間に下つて庄屋を勤めた(村田庄兵衛知世)この庄兵衛の三世の孫が知賢で小島村に別居し大庄屋、代官になつた。

奥平氏は入封の翌享保三(一七七一)年領内の新田検地を行った。同年一〇月大庄屋村田知賢を中津に呼び、郡方勘定人(御山奉行仮役・格式小役人)宛行頼一三石二人扶持に取らたて、(中津藩歴史と風土第四輯)さらに旧庄屋の木津和伝兵衛を検地目代役、新免村加兵衛を検地会役につけ検地を成功させた。この検地で村田知賢は新開取米一六〇石余を打ち出したという(木津和家「当郷伝記略」)。

第4表 中津藩備後領の地方行政機構



の地方行政機構である。備後の居郷の代官の中核である村田家(本村田・新村田)の代官就任は第5表6表のようになっている。初代知賢から知偏一知乗一知行と宝暦期まで養子相続の形をとつておりかならずしも単一出系の世襲ではなかつた。宝暦七年知行(弾藏)の出奔絶家により一族知公の相続や、八代知賢幼少のため別家村田知如が代官職をつとめた。知賢が成長し天明八(一七八八)年六月四日代官職に就任、ここに両村

第6表 新村田家(村田別家)の代官就任

代	本名	別称	親	年	代	略	歴
1	村田知也	藤左衛門、藤右衛門、藤十郎、藤	知賢	安永6 2.28	代官、格式小役人、御代官	3.4 御小姓	
2	知真	藤左衛門、藤右衛門、藤十郎、藤	知如	天明5 8.11	代官	8.12 10	代官
				8.2 7	格式小役人、2人扶持		
				寛政8 10.27	宛行頼11石		
				文化2 7.12	勘定		
3	知忠	藤左衛門、藤右衛門、藤十郎、藤	知如	享和3 12.28	代官見習	文化2 7.12	代官
				10.6	代官		
				8.12 10	知忠名目		
				11.10 18	藤左衛門		
4	知誠	藤左衛門、藤右衛門、藤十郎、藤	知如	文政11 8.10	格式小役人	天明9 12.24	代官
				天明9 12.24	代官		
				10.10 11	代官		
				12.29	代官		

「備後勤事録」「村田家系図」による。

田による代官二人制が実現し以後廃藩まで続いた。小島代官所の定詰役人は、代官のほかに、郷目付・郷方(三々四名)が常勤し、ほかに大庄屋・庄屋のうち年番の役所詰がいた。「備後勤事録」に「備後定詰郷目付佐竹小弥太」とあり、現地から登用された。一八世紀半ば以降両佐竹・河合・中山の四家がほぼ世襲していたようである。これら現地登用役人にすべてをまかせた訳ではなく、中津藩から役人として郡奉行・在番郡方小頭・在番代官・在番郷目付などが派遣され、これに対して現地役人は居代官・居

第5表 本村田(村田本家)の代官就任

代	本名	別称	親	年	代	略	歴
1	村田知賢	藤左衛門、藤右衛門	野村中上野村江原某2男	享保2 3.10	自邸を出張陣屋に提供	3.10	郡方勘定人・山奉行仮役・格式小役人
				4.6	宛行頼13石2人扶持		
				10.7	代官		
				16.11.25	格式小姓、死去		
2	知偏	仲右衛門、忠右衛門	養子	元文4 7.1	格録共家督・代官	17.1	代官
				寛保2 2.2	徒目付仮役		
3	長則	平次右衛門、忠右衛門	養子	寛保3 3.12	備後格録共家督、代官	3.12	幼少のため宛行半減
				7.1	出奔、断絶		
4	知公	藤左衛門	養子	7.3	村田家相続、代官	7.3	宛行13人3人扶持
				14.12	代官見習		
5	知行	藤左衛門	養子	宝暦6 6.11	家督、代官	6.11	出奔、断絶
				7.1	出奔、断絶		
6	知廣	藤四郎、藤右衛門	知公の仲	明和3 1.25	病死	1.25	病死
				14.12	代官見習		
7	知真	藤四郎、藤右衛門	知公の仲	宝暦14 3.3	家督、代官	3.3	宛行13人3人扶持
				5.8.22	病死		
8	知實	藤三郎	知廣の仲	安永5 11.15	家督、幼少のため宛行半減	11.15	代官見習
				4.3.18	代官		
9	知義	七十郎、藤右衛門	知賢の仲	天明8 6.4	代官	6.4	病死
				10.21	病死		
10	知直	藤四郎、藤右衛門	知廣の仲	天明8 12.5	格録共家督	12.5	代官
				9.1.31	代官		
11	知敬	藤四郎、藤右衛門	知廣の仲	天明11 6.16	代官見習	6.16	格録共家督
				6.4	代官		
12	知勝	平次右衛門	養子	天明11 11.11	代官	11.11	代官
				7.7	代官		
13	知雲	平次右衛門	養子	天明11 4.7	代官	4.7	代官
				4.7	代官		

「備後勤事録」「中津市立図書館蔵」「村田家系図」による。(中津藩史料館蔵による)

郡目付などと呼ばれていた。享保二(一七一七)年から明治四(一八七二)年までに在番小頭の氏名の確認できるものは五名、在番代官二十一名、在番御目付十一名で、在番期間も短く、常時在番していたものではないと思える。中には郡方小頭と在番代官を兼務したのもあり「小頭代官」職称として残っており。(中津藩歴史と風土十輯付表1)

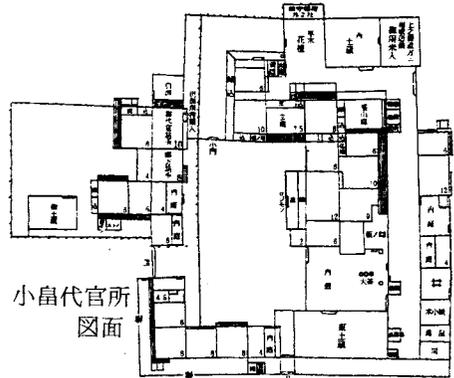
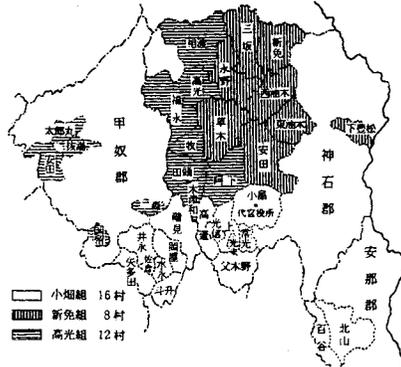
在番代官も寛政期以降は二人制になっており、天保二(一八三一)年の筑前への通達の中に、「一、郷目付御役方者 郡筋御役人并下方之曲直見聞致候事故、其身慎之方勿論之事ニ候得者、備筑御領分者御手遠之場所ニ付、別而嚴重不相勤候 而者下方ゆる々有之候、依而諸事古格不取失、御方重々可相勤(以下略)」とあり、飛び領支配は遠隔地なるが故に殊にきびしく治安管理に心掛けるように遠したものである。

第7表は備後領における農民騒動を表示したものである。一揆の形態は越訴・屯奪・不穏などであり。その原因は①凶作・飢饉による貧窮からの逃亡 ②納税定引の復活要求、年貢減免 ③苛政への反抗である。奥平氏は当初は現地の有力村役人を代官に登用する在地型支配方式を

第7表 中津藩備後領の農民騒動

発生日月	発生地	形態	逃散先	原因・要求その他	典拠
安永7. 冬 (1778)	備後領神石郡父木野村・高蓋村	越訴	-	父木野村庄屋村田庄兵衛は、高蓋村庄屋大崎宅右衛門と納租定引の復活要求を藩庁に直訴。村田は中津に送致され投獄3年、減刑により放免。藩は安永7(1778)年より領内で3107石4升8合の定引を実施。	【神石郡誌】
天明7. 正 (1787)	備後領神石郡永野村	屯集	-	永野村百姓20人ばかり氏宮に集り騒ぎ立てる。郡方4人かけつけ、農民1人を石捕。	【下毛郡史】
天保4. 11. (1833)	備後領油木組永野・高光村ほか	不穏	-	永野村百姓小右衛門ら苛政に抗し、小島代官所へ押寄せ。翌5(1834)年8月28日、小右衛門処刑、9月16日、他の8人出牢払い。	【天保4年中津領の一揆】
慶応3. 11. (1867)	備後領	不明	-	百姓一揆起こる。	【ふるさと歴史年表】

第8図 中津藩備後領の村組



(神石郡三和町役場所蔵) 図中の点いは裏敷を示す。

古墳探訪連歌三題

赤松 雅子

つくし摘む
いにしえ人も 通いしや
道をたどれり 今吉備の里

古墓の礎苔に おゝわれて
葬むらう人なく ただ春の風
過ぎにけり
あゝ過ぎにけり うすがすみ
ほのかに夢に 見えたまうかな

平成四年三月二十二日

(財)義倉より助成金

とっているが遠隔地支配の矛盾と幕藩体制そのもの矛盾に対する農民層の抵抗によってゆるやかであった出張在番制も次第にきびしくなっていた。天明期から天保期にかけて在番代官の在勤回数が増え期間が長期化していることにも示されている。三六カ村を大庄屋の元に三組に分け、支配の網を綿密にしているがこれについては次の機会にゆずる。

本稿はその大部分を(中津藩史料叢書)中津藩歴史と風土十輯を参考とさせて頂きました。

毎年恒例の(財)義倉(河相典男理事長)の助成金が本年度は本会にも贈られることになり、去七月三日田口会長、中村副会長が贈呈式に出席されました。

(財)義倉は、江戸時代後期、千田の河相周兵衛等によって結成された窮民救済組織で、今日では財団法人として毎年、教育・福祉・殖産の各部門で功績のあった民間団体に多額の助成金を出しています。

この助成金は親子古墳めぐり十周年記念誌の出版資金の一部として使わせていただきます。

福山市大門町を探訪して

小島 袈裟春

○大門貝塚跡と製塩遺跡

国道2号線の狭い歩道のすぐ脇で、ガードレールもなかった。国道拡張によって昭和三十四年頃、完全に取除かれ、北側の地山の東裾に遺物の含有土がわずかに残って居たが、それも民有地となつて姿を消し、一本の標識のみが、大型トラックの巻き起す風圧に振動して居るばかりであった。

昭和四十三年、福山に来た私は近くの伊勢丘に住んで居た。子供達は大門駅のすぐ上にあつた、大津野小学校に通つて居たので、この付近は散歩がてらに良く歩いた所である。たゞ貝塚のある事はずっと後になつて知つた事だし、又貝塚の北、山陽本線の南側上下を駅の方に辿る道は、ガラクタの散乱した歩きにくい地道であつたが、後に村上正名著「備後物語」によつて線路を含めたこの付近一帯は、古代の製塩遺跡だと知つた、勿論ガラクタと見えたのは師楽式土器の破片で、それと知つて探しに行った時には、もうすっかり舗装された後なのであつた。

○五箇八幡社

何時の頃の事なのであろうか、備後の東南部と備中の一部を含めた、坪生庄十三箇村の惣産土神、現、坪生町の新中八幡社が分裂し、大門村の人は神像を持帰り津之下の池に長年沈めて置き、後に祀つて五箇村の産土とした、と西備名区に記されて居る。今回の探訪の講師の方から、それは神将の事で拜殿前に取付けた箱？の中の二体の像がそれだ、と教えられた、虫喰いだらけの木像だが、動きのある神の形、袴の括り方等に手練の技が見えて、年代物の様に思えた、もし専門家の鑑定が出来れば新中八幡社の創立年代も判明し、坪生庄の編年の手掛りになると思うのだが。

○城の段(枝広城跡)

今回の大門町探訪が一層面白くなつたのは、枝広信氏の論文がタイムリグ良く「山城志」に掲載されたからでもあつた。

当然私も大きな期待を持った、私は以前から、神辺城攻略の前段階である「坪生要害」の戦いに興味を持って居て、天文十六年(一五四七)四月に行なわれたと思える(どの史書にも記載がないと云う)この戦いの

様子は「西備名区」に記された二件の感状、毛利元就から、小早川家臣の末長又三郎及び乃美新四郎宛に出したものと、「坪生村誌」(猪原薫一編)に引用してある「大日本地名辞書」の大内氏実録(天文十六年四月毛利、小早川軍、備後外郡に戦い二十八日坪生要害龍王山を抜く)の記事に依るしかないが、小早川の両将は何れも水軍である事から、坪生への最短距離、大門湾に秘かに上陸して夜襲を含む奇襲攻撃を掛けたのではないかと考えて来たのである。

その理由は、坪生要害(現清水丸跡)は意外に規模が大きく数百人の籠城も可能である事、要害と城之段とは現在でも歩行一時間足らずで、特に大門北の峠から城之段は目の下二百米位、坪生側の制圧下に新城を築くのは難かしいと思える、等である。

しかし考えて見れば、万一坪生要害の攻撃に失敗して追撃を受けると、前記の理由で全滅の危険がある。従つて橋頭堡が必要、との見方もある。又城之段は坪生要害攻略後に築いた、との考えも成り立つ。

さて私は十年程以前にぎつと見学した事があつて今回で二度目であるが、西北の鞍部に堀切りの跡はあつても、単郭式で北側に土塁の跡も見えない

事から、坪生方面など山側より、海側からの攻撃を意識した、対海賊など港灣の守備が主目的の城の様に思えた。そう云う目で昔の海岸線の辺りから観察すると、この城跡は実に良い位置にある。小早川の水軍は、その遺構を利用したのではなからうか。

○真明寺(昭和初期に無住となつた)

西備名区に依れば真明寺は天文年中(一五三二〜一五五五年)、岡志摩守が菩提寺として建立した、とある。位置関係から岡氏は城之段の城主であつた事は動かないと思う。

枝広説賛成である。もう一つの興味は備中大橋山城主で、笠岡の陶山氏と戦い敗れ、本寺で自刃し寺内に墓のある、高田河内守の事である。どの時代の人であらうか、西備名区には、天正中(一五七三〜一五九一年)とあり、六郡誌でも天正頃とあるが、こちらは上之坊として居る、何れにしてもこの時代、備中西南部は小早川隆影の勢力下で安定し、相手の陶山氏はもう六十年程も前に笠岡落城で退去して居るのである。年代や相手の取違えなのであろうか、そして又、裏山の城之段をめぐる二度の落城哀話は、山城志に枝広氏の語る如

くであってこの地は三城の主が命を落した非運の所なのでもある。

○上之坊

坪生村誌に依れば、この寺は元、坪生の別所にあつたと云う、寺の山号が、別所山であるから、伝承はほゞ間違ひあるまい。

寺が何時何故大門に移つたのかはとも角として、興味の一つは境内にある、神原氏建立と思える十三重石塔である、石塔には神原氏の三名の名が陰刻されて居るが、実はその人達が西備名区に坪生村・西山城主と記されて居て、享禄年中(一五二八年頃)没落とも書いてある、西山城は寺の故地別所から北三百米程の小尾根上に、今も痕跡を残す。

石塔は城主、神原氏が先祖供養と武運を祈つて建立したのか、それ共没落後に縁者が菩提寺を大門に移し、三名の冥福を祈つて建てたものであろうか、年代が不明で残念であるが、神原氏の後裔は今も坪生の里に栄えて居るのである。

○大門の名称について

湾の入口東側に敵島社を祀る鶴山がある、西側には春日社を祀る亀山がある。波静かな海上に相対するこ

の島山を大きな門に見立てた。一般的なこの説明は誠に説得力があるけれども、又疑問もある。何故村内にその島がある、東の石川村(野々浜)、西の津之下村は別名で、一番奥の村だけが大門なのか。(現在は福山市と合併して、大字として大門を使

つて居るが昔は個々の村であつた)。今回の探訪で偶然、上之坊で頂いたパンフの高田一夫氏の論文に「大門の名称は、豪族の屋敷にあつた、大きな門から転化した。」とあつた。これは強い説得力である。

ではその様な領主的又は郡司的な立場の者が大門に居たのであろうか。私は考える。一つは前述した製塩遺跡との関連である、製塩には大量の薪が必要だ、大門は海岸線は短かいが、背後に広大な山地がある。現在幕山と呼ばれて居るが私は薪山の転化と考える。二つは坪生庄の産物や土器との関連である、坪生町から大門にかけては、青白色粘土層が通り、坪生町内には数ヶ所の古代窯跡があつて奈良期からの大がめや重布目瓦は、昭和五八年、奈良国立文化財研究所の調査によつて、平安京、高倉宮屋敷跡出土のものと一致する事が判明した。(以上つぼう郷土史研究会編、つぼうたずね歩き、より

抜粋)

土と薪はあるのだから製塩土器も焼かれたであろう。さてこれ等の製品は何処の港から出荷されたのか。私は最短距離の大門の津を考える。元和六年水野勝成による検地石高は、津之下二四五石、野々浜四三三石、大門三一六石、合計九九二石である、千石に満たない三ヶ村内に、寺は七ヶ寺もあつた、村の作柄だけの経済では保てまい。大門湾入口には、藤原氏の氏神と平家の氏神とが鎮座して、古代権力者の力の入れ方がうかがわれるのではないか。津の司も居たのであろう。大門は坪生庄十三箇村の総窓口として、その繁栄を取仕きつたのだと思う。あの城之段も、前述の如くその権力の象徴、大門を守る自衛の城砦なのであろう、と。

六月例会を担当して

一九九二、六月 後藤 匡史

六月十四日、日曜日の朝、白々と夜が開けた午前五時頃、戸を開けてひよいと空を望げば、うっすらと雲が広がり所々、雲の割れ間から青空、これなら雨の心配は、なさそうと、昨日、廣保のお母さんの所から借り

た鎌を持って西谷、枝広城の山麓まで車を走らせ、登り口の草を刈つて一汗かいた後、帰って朝風呂に入りさっぱりとして仏様に昨日もらった花を供え例会の無事を祈り身仕度して八時過ぎ集会所の大門駅へ行きまあ三十人か多くて四十人も来ればと想っていたのが何んと六十一人、驚ろき、桃の木、庭の山しよの木、雨が降るでるなく、日が照るでもなく丁度程々である。

そして又、何か新しい発見があれば大門だい(大門題)になると・・? それでも上之坊では殿様の奥方のお籠が納戸の際に置いてあつた。

又、光円寺では庭師の塩出氏の熱のはいったお話しで、ここで写真をパチリ、パチリ。

まあ今日の例会は歩け、歩けの強行軍なのか長蛇の列が続き山道、坂道峠道：皆んな歩くことの必要を感じたことではなかつたかな何んちゃって

一句

○例会も天気が良くて

余裕ありーよう云うわ

○例会を務めて心に

ゆとりありーアンタの云うとうり

十月例会(期日一〇月一〇・一一日)

播磨路の旅 御案内

思い出の多かつた讃岐路が昨日のように思える今、また本年度の一泊二日の研修旅行計画を案内するときがきて、今更月日の早いのを身にしみて感じています。

本年度の旅行先については、昨年会員のアンケートにより播磨方面と決定しています。

そこで、検討したコースと概略をつぎのとおりお知らせいたします。

なお、要項は後日事務局からお知らせいたします。

※会費 会員二五〇〇〇円
一般二六〇〇〇円 } の予定

一日目(一〇月一〇日)

永富家 鎌倉時代に伊賀永富庄から移って来たと伝えられ、江戸時代には代々龍野藩の大庄屋役を務めました。

その居宅のうち、江戸時代後期の文政三年(一八二〇)に建てられた本瓦葺・入母屋造・一部二階建の主屋と長屋門、江戸時代末の建築である粗納屋・大蔵・乾蔵・内蔵・味噌蔵・東蔵がそのまま残っており、瓦に見える「三ッ銀杏」

の紋は永富家の紋所で、昭和四二年(一九六七)国の重要文化財に指定されています。また、永富家には貴重な古文書や、当時の生活様式をうかがえる民具や農具などが数多く残され一堂に展示し一般に公開されています。

龍野城 鶏籠山の山城と山麓の平山城との二期に分れ、山城は約四八〇年前赤松村秀によって築かれ、山麓の平山城は寛文一二年(一六七三)に信州飯田から脇坂安政が移って築城したものです。

現在の本丸御殿、白亜の城壁、多門櫓、埋門、隅櫓は復元したものです。

歴史文化資料館

龍野は古代より山陽道・美作道が走り、中世には筑紫大道、近世には揖保川の水運を常に交通の要所として栄えて来ました。このため多くの文物が残されていますが、原始より近世までの文化資料を保存公開しています。

聚遠亭 その昔、松平定信が来遊したとき、ここからの眺望絶佳をたたえて「聚遠の門」とよんでから聚遠亭と名づけられました。心字池うえにある茶室は、庭園、池、杉垣根などと調和した書院造

りを模した数寄屋風で、市指定文化財にもなっている。

醤油資料館 龍野醤油醸造の始まりは、天正一五年(一五八七年)と伝えられています。

現在は近代設備のもとで生産されていますが、昔は大豆をたき、小麦を炒り、全て人力で造られていました。当時の用具文献資料を一堂にそろえて醤油造りの今昔を見ることが出来ます。(市指定文化財)

霞城館 三木露風、矢野勘治、内海青潮、三木清らの遺品、蔵書などを一堂に展示しています。

近くに市指定文化財史蹟の旧龍野県庁跡、家老門があります。

斑鳩寺 今から一三〇〇有余年前、聖徳太子が開創した霊刹です。

昔は七堂伽藍、数十の坊庵が甍をならべ真に壮麗を極めました。今より四五〇年前、戦禍により、惜しくも堂塔悉く焼失。その後、当山中興昌仙法師等により再建されました。

三重塔 斑鳩寺伽藍のうち最古のもの。天文十年(一五四一)斑鳩寺全焼の後、永禄五年(一五六二)

に再建された。三重ながらよく均斉がとれ、室町末期の秀作であり、

かつ、西播地方に残る古建築のうち唯一の国指定の重要文化財です。

聖徳殿 斑鳩寺で最も重要な伽藍、聖徳太子一六才の尊像を安置する。明治四三年、もとの太子堂に中殿・奥殿が増設された。大正三年竣工。

帝室技芸員・名古屋市の伊藤平左衛門の設計による。奥殿は法隆寺夢殿を模した八角円堂です。

宝物収蔵庫 国・県・町の補助を受け、昭和五四年七月に竣工した。日光・月光両菩薩、十二神将、勝鬘經講讃図、紺紙金泥釈迦三尊画像、紺紙金泥十六羅漢画像など国指定重要文化財が収納されています。

国民宿舎「赤とんぼ荘」桜で有名な龍野公園、つつじの名所白鷺山公園の良い環境にめぐまれた山の中腹にあり、眼下に揖保川の清流、播磨平野を一望に眺め、はるかに瀬戸の島々を望む眺めは絶景。

当地の詩人、三木露風の代表作「赤とんぼ」に因んで「赤とんぼ荘」と名づけられた。

不滅の名詩「赤とんぼ」を口ずさみ一夜を楽しく過ごしましょう。

二日目(一〇月一一日)

書写山円教寺 平安時代の康保三年(九六六)、性空上人が仏道修業

の霊地を求めて九州から東へ向う途中、書写山に瑞雲がたなびくのを見て、ここに円教寺を開いたと伝えられています。

もっとも栄えた鎌倉末期から南北朝時代にかけては、三〇余りの院や坊があり、天台の三大道場の一つでした。

現在は、塔頭は六院を残すのみとなっておりますが、神秘的な深い森のそこかしこに一千余年の祈りの歴史が刻まれており、今なお霊場としての厳肅さが保たれています。

○寿量院(国重文) 江戸中期の建物、藪戸、中門など寝殿造の古い形式をそなえ、内部は床や違い棚がついた書院造になっています。

○摩尼殿 天録元年(九七〇)創建。本尊は六臂如意輪観世音菩薩。大正一四年失火の為に全焼し、昭和八年に再建されたのが現在のものです。

○大講堂(国重文) 円教寺の本堂にあたる堂で、寛和二年(九八六)花山法皇の勅願により創建。本尊は釈迦如来、脇侍は普賢、文殊菩薩で三体共重要文化財です。現在のものは室町初期のもの

ので、昭和三十一年解体修理がされています。

○食堂(国重文) 承安四年(一一七四)後白河法皇の勅願により創建。現在のものは室町期のも。別名「長堂」と呼ばれる通り、長さ約四〇米もある二階建大建築で、腰縁をめぐらすなど、仏堂としては珍しい構成となっています。

現在は宝物館として利用されています。

○開山堂(県重文) 寛弘四年(一一〇七)性空上人の没後、弟子の延照律師が創建。上人の木像を作り、体内に御真骨を納めまつ。現在のものは江戸建築のものです。

なお、この堂の軒の隅に、左甚五郎の作といわれる力士が、顔をゆがめて大屋根を支えています。おもしろいことに、四隅のうち北西隅だけ力士がいまぜん。重みに耐えかねて逃げだし、宋栗郡の一宮へ行ってしまったという伝説が残っています。

壇場山古墳 全長百四十mの前方後円墳、西播磨最大の古墳です。周囲に濠をめぐらし、後円部の頂上に大石棺が見えています。

なお、附近に第二の古墳「陪塚」。第三の古墳「山之越古墳」があります。

石乃寶殿 神代の昔大穴牟遲(おほあなむち)、少毘古那(すくなひこな)の二神が、国土を鎮めるに相応しい石の宮殿を造営せんとして工事を進めるも、工事半ばなる時阿賀の神一行の反乱を受け、此の宮殿を正面に起すことが出来なかつた。(右下に続く)

郷土史入門講座のご案内

4回	7月25日(土)	地名あれこれ	城郭部会長	出内博都
5回	8月22日(土)	福山の武将	会長	田口義之
6回	9月26日(土)	水野氏の国策	特別講師	立石定夫
7回	10月24日(土)	福山地方の信仰	名誉会長	神谷和孝

- 主催 備陽史探訪の会
- ① 時間は何れも午後一時三〇分開講 同三時三〇分終了予定です。
 - ② 会場は全て福山市花園町 福山市中央公民館第2会議室です。
 - ③ 会費は全て無料で誰でも聴講できます。但し、百円程度の資料代を徴収する場合があります。

中世を読む会 (城郭部会主催) 毎月第3金曜夜七時より福山市中央公民館和室にて開催中

鎮の石室(通称、浮石)は、三方岩壁に囲まれた巨岩(容積七m四方で棟丈約六m)の殿嘗で池中に浮く東西に横たわりたる姿です。また、池中の水は、霊水にして如何なる早魃に於いても渴することなく海水の満干を表わし、万病に卓効あるものと云われています。会員の皆さんの賛同を得て、多くの参加を心からお待ちします。

座談会「信長」

―織田信長の実像に迫る―

備陽史探訪の会主催 (時) 平成四年八月二日(日) 午後一時三〇分～四時三〇分 (場所) 福山市丸ノ内一丁目 福山城湯殿 (内容) 基調講演の後自由討論 講師 名誉会長 神谷和孝 司会 会長 田口義之 (会費) 無料

(参加方法) 申し込みは不要です。誰でも自由に討論に参加できます。※発言者は事前に事務局まで申し出ていただければ好都合です。(懇親会) 終了後、例年通り、市内のビアガーデンで懇親会を催します。参加自由で希望者は座談会終了後その場にお残り下さい。(問い合わせ先) 事務局まで

備陽史探訪の会九月例会

バスツアー

神石郡三和町の
史跡めぐり募集要項

担当 出内博都・馬屋原亨

期日 平成四年九月一三日(日)

午前八時三〇分 福山駅北

口 キャップスホテル前集合

※午後五時三〇分福山駅着解

散予定

会費 会員二八〇〇円

一般三二〇〇円(貸し切り

バス代等実費)

定員 五〇名

申し込み方法 事務局まで電話か

葉書でお申し込みください。

但し、定員に達し次第締め

切ります。

備考 雨天決行、弁当持参、山歩

きの出来る服装で!

(主な見学場所)

父木野辻堂の木像 辻堂に安置さ

れている薬師如来像は、室町時

代(一四〇〇〜一五〇〇)の作

といわれています。

父木野村田屋敷跡 見事な石積は、

往時をしのぶことができます。

固屋城跡 固屋城は、志摩利馬屋原

一族の城の一つで、標高六四三米

の峻嶒な山城で、本丸、二の丸、

三の丸、出丸などの跡が残ってい

ます。

代官所跡 三和町の大部分は、享保

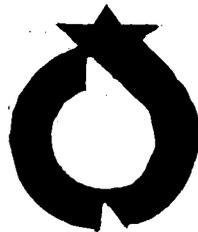
二年(一七一七)豊前中津藩主奥

平昌成の領地になり、その支配の

ため小島に代官所が置かれ、父木

野の庄屋村田氏が代官に任じられ

一五〇年間続けられました。代官



三和町章

所跡地には、三和町役場が建って

います。

光末清瀧神社 本殿は、二間一尺の

正方形作りの小社ですが、竜の突

出彫刻二十四、獸頭十数個、本殿

内にも立派な彫刻があり、また本

殿正面軒裏には一米近い籠彫手法

作りの彫刻があります。

また、随神門の御神像は、安土、

桃山時代の作ではないかといわれ

上村八幡神社 治暦元年(一〇六

五)宇佐八幡宮より勧請建立さ

れました。境内には阿弥陀堂が

あり、祀られている仏像は、南

北朝又は鎌倉期頃の作といわれ

ています。

岩屋寺 天平十一年(七三九)

行基により開創されたといわれ、

九鬼城主馬屋原但馬守正国の菩

堤所にして位牌が祀られていま

す。

また、山門は、代官所廃止に

より代官村田家の門を移転、再

建したものです。

岩屋会下谷の五輪塔群 神石郡誌

によると、九鬼城主馬屋原但馬

守以下五代に亘る馬屋原家の墓

と書かれています。

姫谷焼窯跡 窯は南に延びた支丘

の先端付近から西へわずかに張

り出した緩やかな傾斜地を利用

して築かれ、発掘調査によりは

ば上下に重なった二基が確認さ

れています。

※お問い合わせは

備陽史探訪の会事務局

〒720 福山市多治米町

五一一九一八

☎(0849-5316157)

事務局日誌

○三月二日矢掛町の史跡めぐり

(バス例会) 担当神谷・田口・篠原

(参加五二人)

○四月一二日親と子の古墳めぐりの準

備会於中央公民館(十五人出席)

○四月二九日第一回郷土史入門講座

山口哲品「福山の古墳」三五人

○四月二九〜五月五日古墳めぐり10周

年記念パネル展(中央公民館)

○五月五日第一〇回親と子の古墳めぐ

り(芦田と新市)バス例会百名参加

○五月一六日事務局会議(山城志発送)

○同月三〇日第二回郷土史入門講座

網本善光「吉備の考古学」三〇名

○六月一三日事務局会議(六月例会の

資料作成)

○六月一四日六月例会「大門町の史跡

めぐり」担当後藤匡史 参加六三名

○同月二八日第三回郷土史入門講座

七森義人「古代山城より見た備後古

代史」二八名出席

備陽史探訪の会事務局

〒720 福山市多治米町

五一一九一八

☎(0849-5316157)